

「ガンピーさんのふなあそび」に学ぶ保育者の姿

○はじめに

イギリスの田園風景を背景に、ガンピーさんというやさしい紳士と近所の子ども、身近な動物たちによって展開される船遊びです。主人公のガンピーさんを保育者、子どもや動物たちを元気のよい個性豊かな子どもたち、船や川を幼稚園・保育所にそれぞれ置き換えて読みます。

季節は春から初夏にかけての頃です。絵はどのページも淡く柔らかい色調の絵で構成され、春から初夏にかけての田園の緑や土、水、風などが感じられます。この絵本には、注意をしながら文を見るとわかるように子どもが喜ぶさまざまな繰り返しが入り込んでいます。登場する動物の言葉は、冊子にもあるように少しずつ変化をつけながら繰り返されています。やりとりのバリエーションとしては、子どもが「一緒に連れてって」と言うと、ガンピーさんは「いいとも、けんかさえしなけりゃね」と言い、うさぎが「私も一緒に行っていていい」と言うと、ガンピーさんは「いいとも、飛んだり跳ねたりしなけりゃね」と言い、ねこが「私も乗りたいな」と言うと、ガンピーさんは「いいとも、うさぎを追い回したりしなけりゃね」と言います。この後も、同じようなやりとりが繰り返されます。

○絵本のあらすじ

ある晴れた日、ガンピーさんは家に面した川に船遊びに出かけます。すると、近所の子どもが「一緒に連れてって」とやってきます。ガンピーさんは、「いいとも、けんかさえしなけりゃね」と乗せてあげます。次に、うさぎを乗せます。その後、ねこ、いぬ、ぶた、うし、ひつじ、にわとり、やぎが順にやってきます。ガンピーさんは、動物たちと約束しながらも船に乗せてあげるのです。

ところが、子どもや動物たちはしばらくはおとなしくしていたものの、約束を忘れて騒ぎ出し、船は転覆してしまいます。それから岸まで泳ぎ着いて、お日様に当たって体を乾かし、野原を歩いて帰りました。みんなでお茶をして、帰り際に子どもと動物たちにガンピーさんは「またいつか乗りにおいでよ」と言って見送るのです。

○ガンピーさんの対応

約束を破って船が転覆したにもかかわらず、ガンピーさんの表情は穏やかなままで、「だから言ったでしょ」「もう乗せないよ」などと叱ったりしません。そ

れどころか、船の転覆のハプニングを楽しむかのようにゆっくりお日様に当たって乾かし、野原を歩いて帰るのです。さらに、みんなにお茶をごちそうして、「またいつか乗りにおいでよ」と言って見送るのです。

ガンピーさんはなぜ叱らなかったのでしょうか。これは単にやさしいからではありません。例えば、子どもはけんかをするもの、うしはどしんどしんするもの、にわとりはぱたぱたするものなど、子どもや動物たちのことをよく理解しているからではないでしょうか。ガンピーさんは、もしかしたら始めから船が転覆することを予想していたのではないのでしょうか。だから叱らず、穏やかな対応ができたのではないのでしょうか。

○絵本の構成

表紙は、全面にガンピーさんと動物たちが舟に乗っている様子が描かれています。その次に、馬や羊が放牧されている田園風景が描かれています。その後から絵と文とが示されます。文は次のようになっています。

- ・これはガンピーさんです。
- ・ガンピーさんは ふねを いっそう もっていました。いえは かわの そばに ありました。
- ・あるひ、ガンピーさんは ふねに のってでかけました。「いっしょに つれてって」と、こどもたちが いいました。「いいとも」と、ガンピーさんは いいました。「けんかさえ しなけりやね」
- ・「わたしも いっしょに いって いい、ガンピーさん？」と、うさぎが いいました。「いいとも。とんだり はねたり しなけりやね」
- ・「あたしも のりたいなあ」と、ねこが いいました。「いいとも」と、ガンピーさんは いいました。「うさぎを おいまわしたり しなけりやね」
- ・「ぼくも つれてって もらいたいなあ」と、いぬが いいました。「いいとも」と、ガンピーさんは いいました。「ねこを いじめたり しなけりやね」
- ・「わたしも おねがい、ガンピーさん」と、ぶたが いいました。「いいとも。でも、うろちよろするんじゃないよ」
- ・「あたしも のれるかしら？」と、ひつじが いいました。「のれるとも。でも、めえ めえ なくんじゃないよ」
- ・「あたしたちも いって いい？」とにわとりが いいました。「いいとも。でも、はねを ぱたぱた やるんじゃないよ」と、ガンピーさんは いいました。

- ・「ぼくも どこかに のせてって」と、こうしが いいました。
「いいとも。でも、どしんどしん あるきまわるんじゃないよ」
 - ・「わしも のっていいかな、 ガンピーさ ん？」と、やぎが いいました。
「いいとも。でも、けったりするんじゃないよ」
 - ・しばらく、みんなは たのしそうに かわを ぐだって いきました。ところが、そのうち やぎが けとっぱし、こうしが どしんどしん あるきまわり、にわとりたちが はねを ぱたぱた やり、ひつじが めえめえ いい、ぶたが うろちょろし、いぬが ねこを いじめ、ねこがうさぎを おいかけ、うさぎが ぴよんぴよん とびまわり、こどもたちが けんかをし、ふねが ひっくりかえって ……
 - ・みんな、かわの なかに おちてしまいました。
 - ・それから、ガンピーさんと やぎと こうしと にわとりと ひつじと ぶたと いぬと ねこと うさぎと こどもたちは、きしまで およぎついて、どてに あがり、あつい おひさまに あたって からだをかわかしました。「かえりは のはらをよこぎって あるいていくとしよう」とガンピーさんは いいました。
「そろそろおちゃの じかんだから」
そして円卓を囲んでみんながお茶の時間を楽しんでいる様子が見開きで描かれています。
- 最後のページでは、みんなが帰っていきますが、次の言葉で終わります。
- ・「じゃ、さようなら」と、ガンピーさんは いいました。
「また いつか のりにおいでよ」

○ガンピーさんと保育者

この絵本には、注意をしながら文を見ると分かるように子どもが喜ぶさまざまな繰り返しを取り入れられています。登場する動物や言葉は少しずつ変化をつけながら繰り返されています。その繰り返される言葉の中に、それぞれの動物の個性や性格が表れています。

例えば、子どもたちには「けんかさえ しなけりゃね」、うさぎには「いいとも。とんだり はねたり しなけりゃね」、こうしには「いいとも。でも、どしんどしん あるきまわるんじゃないよ」などとそれぞれに「○○しなけりゃね」と注文をつけています。

それなのにみんなはそれを守らないので、船は転覆してしまいます。教育に熱心な人なら「だから言ったでしょ」と言いそうです。でも、一応、注意をするに

はしますが、ガンピーさんは叱りません。それは何故でしょうか？単にやさしいからだけではないように思うのです。子どもたちはけんかをするもの、こうしはどしんどしんあるきまわるもの、にわとりははねをばたばたするものであり、それでよいのだと考えているように思うのです。ガンピーさんは全てを予想しながら、やさしく動物たちを見ているのではないのでしょうか。子どもたちに「けんかをしてはいけない」と言ってもほとんど意味はありません。要求しても無理なのです。それをガンピーさんは理解しているのです。

保育者にもこのような考え方が必要だと思うのです。子どもたち一人ひとりの個性や発達を理解し、無理なことは要求しないし、叱ったりもしないのです。それどころか逆にお茶をごちそうしたり、お別れ時には「またいつかのりにおいでよ」とさえ伝えるのです。このガンピーさんに私たちは保育者の姿を見るのです。

○ 終わりに

この絵本を通して学んだことは、一つ目に、子どもの発達の理解と対応について、保育者は子どもの発達や個性、特徴を理解し、無理な要求をしない、ということです。二つ目に、ハプニングをうまく活用すれば、楽しい生活を作り出すことができるということです。以上のことから、保育者は普段から子どもの様子をしっかりと把握し、ハプニングさえも予測し、それを楽しむ余裕が必要だということです。これらのことが、保育者として学ばなければならないことだと思うのです。

ジョン・バーニンガムには多くの作品があります。ほとんどはパステル的なあわい色使いのものです。描かれる人物の目は点で表現するものですが、素朴でゆったりとした雰囲気のためよい絵本です。しまなみ海道が完成したときに来日し、亀老山でしまなみのスケッチをされたようです。奥さんはヘレン・オクセンバリーです。共に有名な絵本作家でヘレンは保育に関心があるようです。

他に『ガンピーさんのドライブ』『ねえ、どれがいい？』『あかちゃん』『ボルカ はねなしガチョウのぼうけん』などがあります。